Ⅳ－（３）環境にやさしいまちづくり　その１

◎コンパクトシティの実現
◎資源循環型のまちづくり
◎田園の保全と自然環境に配慮したまちづくり

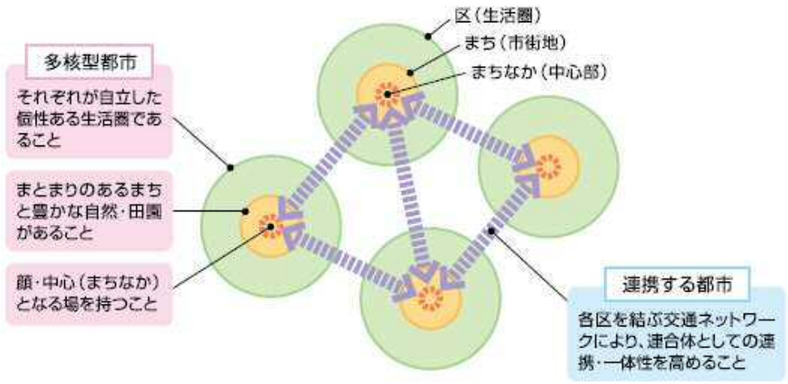
これまでの取組み状況

コンパクトなまちづくり

＜新潟らしいコンパクトなまちづくり＞
「田園・自然」に囲まれたまち（市街地）が，まちなかを中心としたまとまりのある（コンパクトな）まちを形成し区（生活圏）の自立性を高めることと，それぞれの区の連携を高めることにより，様々な個性と魅力をもつ連合体としての新潟市を目指す「田園に包まれた多核連携型都市」を推進。

◆多核連携型都市

〇多核：各区それぞれが，自立した個性ある生活圏となること
⇒各区にはまとまりのある市街地と豊かな自然・田園がある
⇒各市街地には地域性を活かしたそれぞれの「顔」「中心」となる場を持つ
〇連携：新潟市は個性ある８つの区の連携により発展する都市であること
⇒利便性のある交通のネットワークにより，各区の連携を高める
⇒各区が持つさまざまな機能を連携させ，市全体で活用する



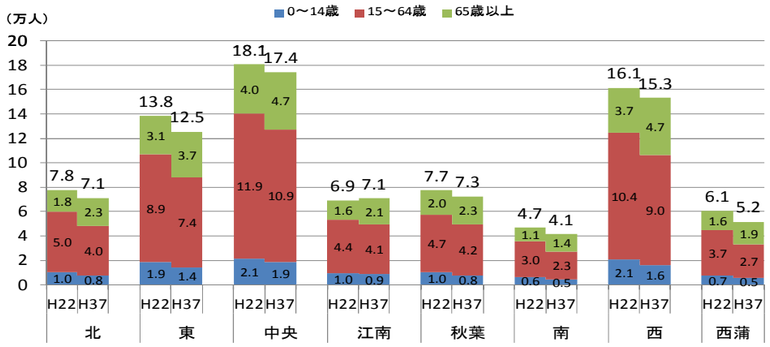
＜市街地拡大から維持への方向転換＞
豊かな自然環境の保全管理と活用，豊かな水辺・田園・市街地空間の創造などを方針に掲げた新たな都市計画基本方針（都市計画マスタープラン）を策定。都市計画区域及び区域区分（線引き）を市域全域に適用し，土地利用に関する基本ルールの統一化。
⇒人口・経済の成長を前提として市街地を拡大する都市づくりから，人口減少社会に対応した都市づくり，自然・田園と調和したまとまりのある市街地維持・形成へ方向転換。

＜交通体系の充実による地域間連携の強化＞
人と環境にやさしい交通体系の構築
〇地区内拠点へのアクセス強化をはじめとする生活交通確保
〇鉄道や幹線バスの充実など都心アクセスの強化
〇都心軸における新たな交通システムの導入
〇公共交通及び自転車・徒歩で移動しやすいまちづくり，スマートウエルネスシティの推進

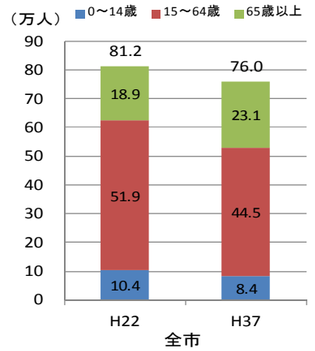
本市を取り巻く状況

●平成22年と平成37年の将来推計人口を比較すると、江南区以外の区で人口が減少。中でも東区が約1.2万人と最も減少が大きく、次いで西蒲区が9千人、西区が8.2千人、北区が6.7千人の減少。

本市将来推計人口（区別）



本市将来推計人口（全市）



出典：国勢調査（H22）結果を基準として推計

●日本において，2050年までに，現在，人が居住している地域のうち約２割の地域が無居住化すると推計されている。

出典：国土交通省「国土の長期展望（2011）」

取組むべき課題と今後の方向性

<u>◎コンパクトシティ</u>
▷　本市の魅力向上や交流人口の増加につなげていくため，本市の特性である潟環境など広大で美しい自然，田園環境と市街地が共生する都市構造を将来にわたって持続していくことが必要。
　そのため，地域経済の活性化に資する開発を除き，市街地の拡大を抑制し，現在の市街地規模を適切に維持していくことが必要。
▷　まちづくりについては、市全体の活性化の観点から、中心市街地を再生し政令市にいがたの「顔」を作ることと、行政区単位での特色ある「まちづくり」を両輪で進めていくことが必要。